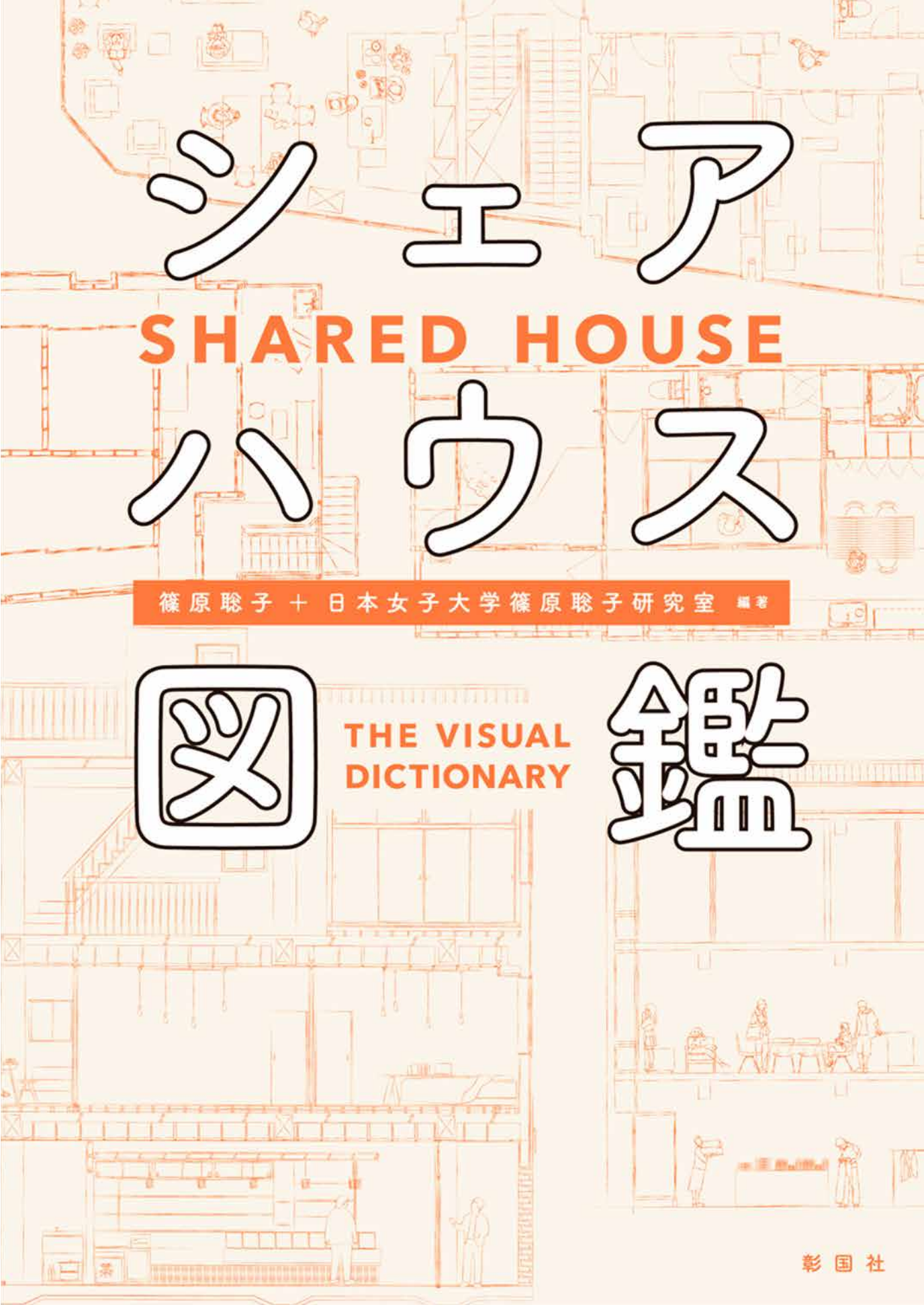




# シェア SHARED HOUSE ハウス

篠原聡子 + 日本女子大学篠原聡子研究室 編著



THE VISUAL  
DICTIONARY

# 鑑



SHARED HOUSE THE VISUAL DICTIONARY

# 【シェアハウス図鑑】

篠原聡子 + 日本女子大学篠原聡子研究室 編著

【シェアハウス図鑑】

|                                      |                              |    |
|--------------------------------------|------------------------------|----|
| 目次                                   |                              |    |
| シェアのデータシート                           |                              | 4  |
| ESSAY                                |                              |    |
| シェアハウスという住まい 篠原聡子                    |                              | 6  |
| # 01                                 | 都市に開く土間 SHAREyaraicho        | 11 |
| # 02                                 | 資材倉庫からオープンコモンに 不動前ハウス        | 19 |
| # 03                                 | 木賃を解体する 鈴木文化シェアハウス           | 27 |
| # 04                                 | 廃ビルを商店街の拠点へ シェアフラット馬場川       | 35 |
| # 05                                 | 京町家を連携 京だんらん嶋原               | 43 |
| # 06                                 | 石巻のサードプレイス SHARED HOUSE 八十八夜 | 51 |
| # 07                                 | 大浴場をリビングに KAMAGAWA LIVING    | 59 |
| # 08                                 | 仏間を残して再生 haus 1952           | 67 |
| # 09                                 | 戸建て住宅に外階段 茶山ゴコ               | 73 |
| # 10                                 | シングルペアレント×シングル スタイリオウイズ代官山   | 77 |
| # 11                                 | 家族でも、他人でも KYODO HOUSE        | 81 |
| セクション                                |                              |    |
| シェアの断面 宮原真美子                         |                              | 86 |
| キーパーソン／地域と連携／空間の境界／物の見せ方・しまい方／伝達のルール |                              |    |

\* 本書で紹介している各事例の家賃、共益費、管理費、光熱費などは、1カ月あたりの金額を示す。  
\* 個室数はシェアハウスの居住者が寝室として使用している個室の数を示す。  
\* 本書で提供する情報は、2017年11月現在の情報に基づいた参考情報である。  
具体的な賃貸情報や法的・技術的なアドバイスを提供するものではない。

ブックデザイン：吉田朋史 (9P / TISSUE Inc.)

海外シェアハウスレポート 97

|        |                        |     |
|--------|------------------------|-----|
| ブラジル   | オスカー・ニーマイヤー設計のコバンに暮らす  | 99  |
| 米 国    | ADUを利用して異世代でシェア        | 100 |
| 米 国    | 分割してエコノミーに住む           | 101 |
| 米 国    | ブラウNSTONに暮らす           | 102 |
| ス イ ス  | 築100年のファミリーアパートメントをシェア | 103 |
| 韓 国    | 50%パブリック／50%プライベート     | 104 |
| 韓 国    | 伝統的シェアハウスの極限個室         | 105 |
| 台 湾    | 折り重なる立体的居場所            | 106 |
| タ イ    | リビングをカーテンで個室に          | 108 |
| タ イ    | 住み継がれる家                | 109 |
| シンガポール | オーナー家族と邸宅に住む           | 110 |
| シンガポール | 外国人＋シングル→コンドミニアムのシェア   | 112 |

Q&A  
小林秀樹先生に聞く  
正しいシェアハウスのつくり方 113

ROUND TABLE  
シェアハウスは何が残せるか 119  
篠原聡子×仲 俊治×南後由和

|                    |     |
|--------------------|-----|
| あとがき               | 126 |
| 編著者略歴・写真クレジット・執筆分担 | 127 |



# シェアハウス という住まい

篠原 聡子

## 【現象としての住まい】

住まいは、いつでもその時々<sup>1)</sup>の社会のあり様を表象している。江戸の長屋は、単身者の多くが暮らした江戸の庶民の暮らしを、戦後の公団住宅は51C型（公営住宅標準設計、図1）に代表されるような、核家族を標準世帯とする暮らしを、それぞれに想起させる。そうした意味で、シェアハウス<sup>1)</sup>は、高度経済成長を経て、少子高齢化に向き合い、豊かさへの再考を迫られている現在の日本の社会を確実に表象している住まいといえるだろう。

近年、コーポラティブハウス、コレクティブハウスなど、集合住宅のつくり方、住み方に対する多様なアプローチはあったが、シェアハウスは住居の選択肢としての波及的効果という点からも、それらとは一線を画している。たしかに、全世帯の1/3、首都圏では過半となった単身世帯の増加という時代の要請にかなったからではあるが、それだけならワンルームマンション（図2）が受け皿であってもよかったはずである。

では、かくも急速に単身者居住の選択肢として定着したシェアハウスとは、どのような住まいなのだろうか。これを定義しようとすると案外に難しい。そこで、まず、コーポラティブハウス、コレクティブハウスとの違いから見えていくことにしたい。コーポラティブハウスとは、明らかに違う。コーポラティブハウスは、一般に、集合住宅（建築基準法的には、共同住宅であることも、長屋であることもある）の形態をとるが、これはそれをつくるしくみに特色がある。通常の民間分譲マンションが建売であるのと異なって、着工前に居住者を募り、その要望を反映

して建設する（図3）。したがって建物をつくるしくみではあるが、建設前から、居住者となる人びとが建設組合をつくるなど、そのプロセスがその後のコミュニティ形成に寄与するケースもある。事業主体が誰になるかによって、そのプロセスが異なるが、住戸はそれぞれ居住者の所有である。ここでは、誰がつくるのか？がテーマなのである。ディベロッパーがつくった商品を買うのではなく、自分たちでつくる、そしてお仕着せでない住空間を、ディベロッパーがつくるよりも安く手に入れるというのが、重要なコンセプトで、コーポラティブハウスとは、そうしたことを実現するためのしくみなのである。

シェアハウスとコレクティブハウスはどう違うのか？この違いは、もう少し複雑である。シェアハウスもコレクティブハウスも、居住者が生活の一部をとにもする共用空間をもつ、という点では共通しているし、基本は賃貸である点も同じである。シェアハウスでは、一般的に個室には水回りがなく、共用であるが、コレクティブハウスの基本は、それぞれ住戸にバスルームもキッチンもある。キッチン、ダイニングルーム、リビングルームなどが通常の住戸より少しコンパクトで、その分、共用の大きなキッチンとダイニングスペースをもっている。ここで居住者が交代で食事をつくり、皆で食卓を囲むコモンミールが、コレクティブハウスでは重要な共同行為である（図4）。北欧から輸入された住様式であり、「ともに豊かな暮らしをつくる」という理念が背景にある。シェアハウスとコレクティブハウスの差は、空間的な設えよりも、ここにある。

コーポラティブハウスが、マーケットから家をつくるしくみを居住者に取り戻そうとしたように、コレクティブハウスは共同生活することで、ファミレスやコンビニや大

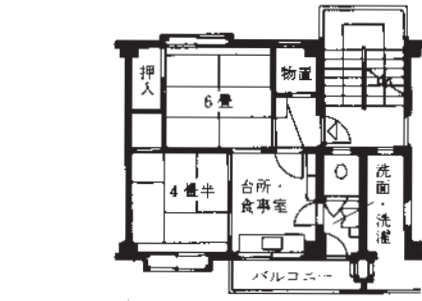


図1 公営住宅標準設計「51C型」1951年（計画：吉武泰水ほか）  
出典：日本建築学会住宅小委員会 編  
『事例で読む 現代集合住宅のデザイン』彰国社、2004年

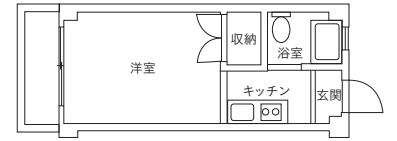


図2 ワンルームマンションのプラン。極小のユニットに極小のユニットバスとミニキッチンが詰め込まれ、日本ならではの単身者用住戸

手のスーパーに乗っ取られた日々の食卓を取り戻し、市場経済から日常生活を取り戻そうとしたのである。だから、コレクティブハウスとは住様式である以前に、運動であり、理念なのである。

その後コーポラティブハウスは、市場経済に取り込まれることで一般的なものとなり、コレクティブハウスはその距離を取り続け、一般的な選択肢として展開するには至っていない。それに対してシェアハウスは、その出自からして、運動でも、理念でもなく、シェアするという状況の共有であり、きわめて対処的な住まいのかたちで居住者による内発的な住まいである。

他人同士がひとつの家やアパートメントをシェアして暮らすという形式は、もちろん日本以外でも珍しいものではない。ニューヨークやシンガポールのような、家賃が高く、残念ながら日本のようにワンルームマンションといった単身者用の最小限住宅もない都市では、経済的に制約のある単身者は家族用の住居をシェアして暮らすしかないのである。しかも、しばしばそれらは想定外の住まい方として扱われ、法的に問題がある場合もある。例えば、シンガポールのHDB<sup>2)</sup>のハウジングは、すべて他人に貸すこと、丸ごとシェアハウスにすることは、基本的に許されていない。HDB住宅は、それを取得する人がその資金を支払うが、そこには公的な資金も入っており、国民が自らの家族の住まいをもつことを支援するのが、HDBの目的であるから、取得者の家族以外が住むことを制限している。ニューヨーク州の法律でも、一般の家族用の住まいに4人以上の他人が同居することを禁止していた（「New York State Multiple Dwelling Law（1929—現在）」では、「Family」の定

義が「with not more than four boarders, roomers or lodgers」となっており、大量に流入する移民の劣悪な居住環境をコントロールするため、家族以外が多数住む空間を、「residential use」として認めていなかった）。

そうした海外の単身居住事情を見るにつけても、日本のシェアハウスが他人と暮らすことを前提とした下宿や寮とは一線を画した住まいとしてそのかたちをもち始めたことは（もちろん、建築基準法的にはこの新しい居住形態について議論があり、それについては「正しいシェアハウスのつくり方」〈113頁〉を参照していただきたい）、かなり画期的なことともいえよう。戸建て住宅や寮のリノベーションが主体であった日本のシェアハウスも、最近は本書で紹介する「SHAREyaraicho」や「LT城西」（図5）のようなシェアハウスという目的のため新築された建築も散見されるようになった。「SHAREyaraicho」には、海外からのインターン生がよくやってくるが、ドイツのシュツットガルトからやってきた大学生は、「シュツットガルトでも、ルームシェアをして住んでいたけれど、そのためにつくられた家に住むのは初めてで、すごく刺激的でおもしろい」と言った。シェアハウスがたんに一時的な住まい方の名称ではなく、住まいとしてのかたちをもったことの意味を、そのあり方を通して考えてみたい。そこに、シェアハウスが現在を表象する住まいとなった理由が見えてくると思う。



図3 コーポラティブハウス「都住創岡山町」。  
お住いでないそれぞれの居住者の希望を  
反映した間取りが、ファサードにも表れている  
(設計:ヘキサ/中筋修、1991年)



## 【アライバルホーム】

日本のシェアハウスは、その出自からして、やや特殊だった。ひとつには、その源流となったのが、外国人用のゲストハウスであった、という点にある。日本にやってきた外国人の旅行や企業へのインターンシップのような、1月から半年といった中期的な滞在に対応した住まいであった。アライバルシティならぬ、アライバルホームとして、海外からの窓口になっていた。ダグ・サンダーズは、その著書『アライバルシティ』で、今世界が直面するグローバリゼーションの中で、国境すら超えて都市へ流入する、大きな人口移動に対して都市がどのように対処するかが、その後のその都市のあり方を変えることを示し、混沌としたスラムやスクウォッター地区の中に、漂流してくる人びとの到着場所としての役割と将来への可能性を見出している。日本の都市にあった外国人用のゲストハウスも必ずしも管理の行き届いたものばかりでなく、安宿のイメージであったといわれているが、さまざまな外国人の到着場所として機能してきた。

インターネットの普及により、2000年くらいから日本人の居住者が増え、シェアハウスという名称が使われるようになった。同時に、空き家になった戸建て住宅に数人で暮らし始める、マンションの一角をルームシェアするなどの内発的な動きもそれに同調して、シェア居住の数は増えていった。運営業者によるもの、内発的に始まったものなど、いずれにしても、規格外の住まいでありながら、必要に応じてその時々柔軟なかたちをとり、お互いの顔が見える。外国人に限らず漂流する単身居住者のアライバルホームとしてシェアハウスは機能し始めた。

日本におけるシェアハウスのもうひとつの背景に、ワンルームマンションの存在がある。この極小の、しかしキッチン・バス・トイレとフルスペックを備えた自己完結した住まいは、シェアハウスとは対極的な、何ひとつ隣人と共用しないで暮らせるのが売りの住まいであった。1960年代に量産され始めたワンルームマンションは、それ以前の風呂なし、台所、トイレ共用の木賃アパートとは対照的に、独立性の高い住まいとして登場した。ワンルームマンションのもうひとつの側面は、運用資産としての側面である。投資対象の物件として、サラリーマンが買える程度の大きさと値段でつくられた住戸であっ

た。管理会社はそれを運用し、家賃がオーナーに入る。オーナーは、どんな居住者が住むかなどは関係なく、居住者も大家とコンタクトをとることはない。大家が庭先に建てたアパートでは、何かと大家と店子(賃借人)のやりとりがあったのとは対照的に、大家にとっても店子にとってもわずらわしくない、というわけである。こうしたワンルームマンションが存在するのは、居住者がそこで人間関係を築く必要がないという前提による。しかし、それは一方で、セーフティネットとしての家族という関係性が弱体化した現在、孤立というリスクにもなる。そうしたリスクを感じる人びとにとって、次なる住まいがシェアハウスであったのは、ある種の必然だったろう。単身居住の高齢者の孤立は、孤独死にもつながるという危機感をもたれるが、それほど差し迫った状況と考えられない若者にとっても、シェアハウスという選択は、長期的な危機管理の戦略であるかもしれない。『建築雑誌』(日本建築学会)の対談で<sup>3)</sup>、建築家で『東京断想』(鹿島出版会)の著者マニエール・タルディッツ氏は、パリでは日本のワンルームマンションは成立しない、パリではひとり暮らしはあまりにリスクが大きいから、と述べていた。そのリスクとは、孤立というよりも犯罪に巻き込まれるリスクという意味であったと思うが、いずれにしても、もし、地縁もなく、家族・親族とも疎遠で、かつ隣人もいないひとり暮らしは、この先、日本にあっては長期的、短期的なリスクを覚悟しなくてはならない。ワンルームマンションは他人にわずらわされない暮らしを提供する一方で、地縁からも家族からも浮遊する単身居住者にとって、アライバルホームにはなり得ない。

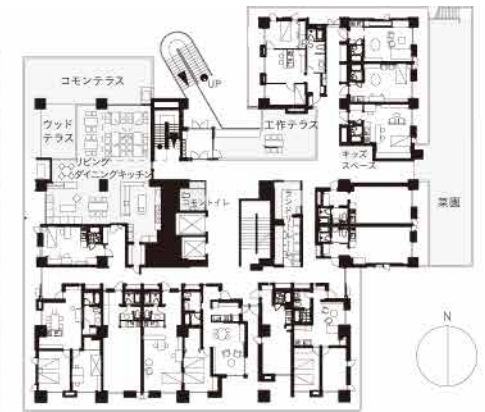


図4 コレクティブハウスの先駆け「かんかん森」における  
「COMMONミール」。多世代の交流の場でもある

## 【シェアハウスという建築】

日本のシェアハウスは、脱ワンルームマンションであると同時に、ポストワンルームマンションという側面もある。ワンルームの個々の独立した暮らしを経験し、その孤独と自由のあとにやってきたシェアハウスブームは、経済性だけが重視されたゲストハウス(しばしば1室に複数のベッドがあった)とは、一線を画す個々の暮らしを個室で担保する形式が主流である。それを痛感したのは、ソウルでシェアハウスの調査をしたときである<sup>4)</sup>。韓国には、伝統的に下宿<sup>ハスフ</sup>と考試院<sup>ヨクシヤン</sup>という単身者用の住居がある。下宿は賄いつきの住居で、考試院はそうしたサービスも共用空間もなく、個室で構成されているのが基本である。こうした古いタイプのものが狭小な個室(考試院では7㎡くらいの個室にトイレとシャワーが設置されているものもある)であるのに対して、新しく、若者に人気のあるシェアハウスと呼ばれるものは、もともと、ファミリー向けのコンドミニアムの1ユニットをそのまま利用している場合が多く、ダイニングキッチン、リビングは豊かだが、寝室部分も2、3人でシェアしているケースが多い(ソウルでも新築のものは、日本式に個室の独立性を売りにしているものもないわけではない)。これは、そのまま、家族用の住居として使用する可能性を排除せず、多面的な不動産として価値を残す、ということでもあるし、シェアという居住形式に特段の建築的な手当てを想定していない、ということなのかもしれない。

さまざまなシェアハウス内での暮らし方を見てみると、個室をシェアするかどうかは、それ以外の共用空間のあり方に関わってくる。個室をシェアすることによって、ベッドルームとそれ以外の空間の境界は弱くなり、そのかわり、共用空間は外に対して閉鎖的になる。一方で、個室が



同、2階平面図  
提供:コレクティブハウスかんかん森

1人に占有され、その扉で公私がコントロールされれば、逆に共用空間は外に開く可能性がでてくる。そうした共用される空間の質がそれぞれのシェアハウスコミュニティの質に深く関わってくる(「シェアの断面」<sup>セグメンテーション</sup>〈86頁〉では、シェアハウス内の暮らしをそうした観点からも詳述している)。

その結果、シェアハウスが、従来の家族用の住居と異なる質をもつとするなら、この共用空間の公共性にこそ意味がある。

それは、空間の問題であると同時に、マネジメントの問題であるから、この共用空間がどのようにマネジメントされるかに大きな課題がある。シェアハウスの居住者は、血縁にも、地縁にもよらない人びとの集団であり、頻繁に入れ替わりがある前提<sup>5)</sup>、オープンエンドな空間である。それが、日常生活の空間として安定的に運営されるためには、いくつかの方法がある。そのひとつは、居住者の同質性を高めることである。「学生専用」「女子専用」に加えて、あまりおおびらにはしていないが、年齢制限を設けているところも多い。家賃設定によって、経済階層も決まってくるだろう(もっとも、この点においては、分譲マンションにおける階層分化よりは相当に緩やかなものといえる。大金持ちでシェアハウスを選択する人はまずいないであろうから)。空間の多くの部分を共用して暮らすには、ある種の同質性が必要であり、そのほうがコンフリクト(衝突、葛藤、対立)も少ない。ひとつのシェアハウスにおける同質性は、地縁や血縁による集団よりも強いのが一般的であろう。ちなみに、前掲の韓国のシェアハウスで、私たちが訪れたコンドミニアムの一角は、居住者全員が男子大学生であった。一方





図5 シェアハウスとして新築された「LT城西」も、シェアハウスという新しい建築空間を提案している(設計:成瀬・猪熊建築設計事務所、2013年)

で、こうした同質性が課題となることもある。同じ時間帯で働く、あまり年齢の違わない人びとの集団だとすると、近隣との関係や共用空間のマネジメントは重荷になる。

そこで、共用空間のマネジメントをアウトソーシングすればよいということになる。居住者の自助や共助に期待しないというわけである。小規模のシェアハウスでも、週1回程度共用の清掃を入れる場合が多いが、これを積極的に取り入れるためには、ある程度の規模が必要になる。50人を超えるような大型のものは、共用部の清掃を週に5回入れるなど、サービスが充実している。そうした大規模なシェアハウスは、企業によって運営され、単身居住者の居住の選択肢として、安定した生活環境を提供している。一方で、市場経済の中でひとつの商品として定着し、ワンルームマンションがそうであったよ

うに、コンフリクトを避けることによって、均質へと向かっているようにも見える。コンフリクトを避けるように仕立てられた均質な空間には、すでに居住者が積極的に関与する余地はない。居住者が積極的に関与する余地のない場所は、住まいというよりは施設という方がふさわしい。

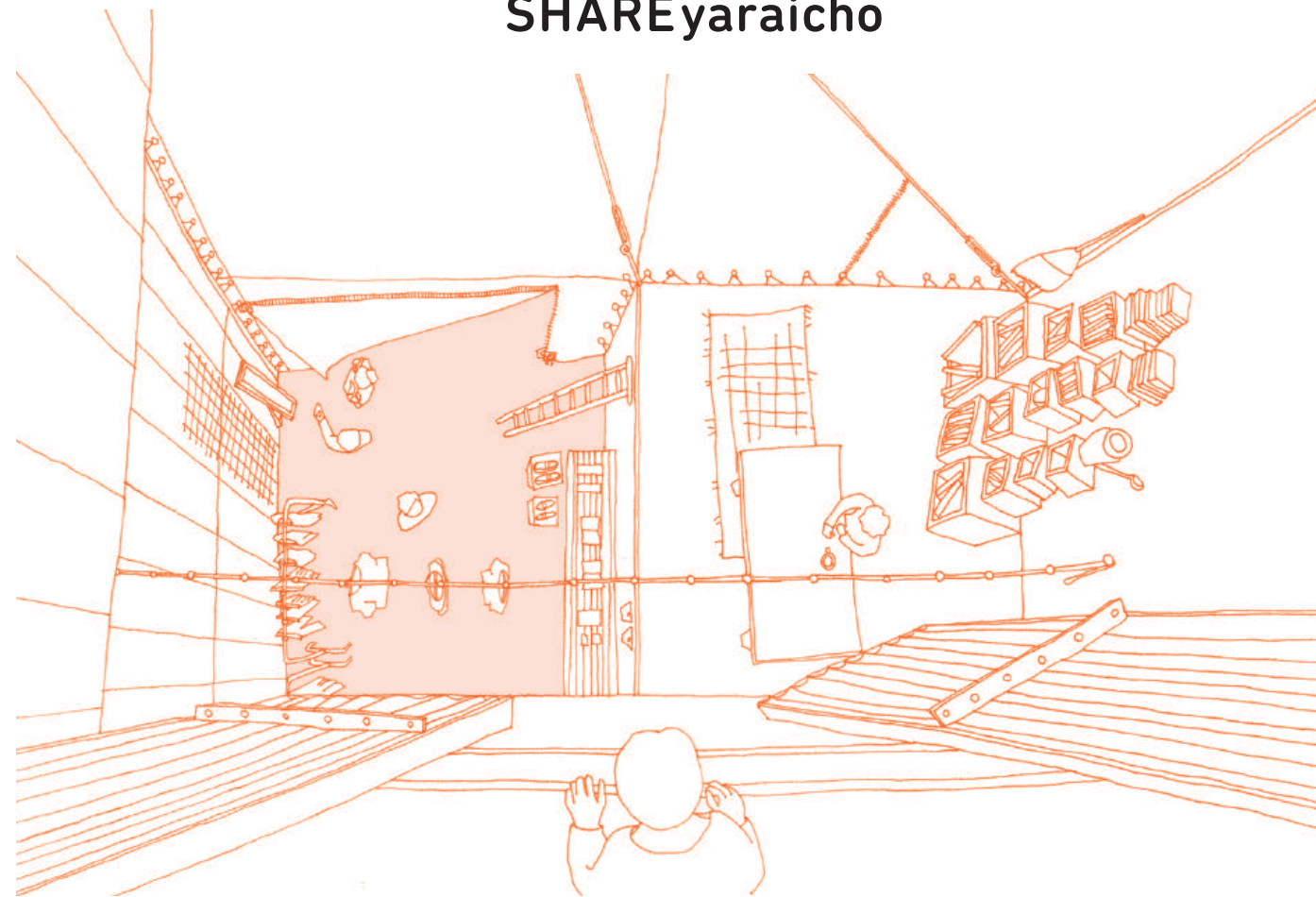
シェアハウスと呼ばれるものには、戸建てスケールのものから、100戸を超すような大規模社員寮(実際、社員寮から改修されたものも多い)のようなものまであるが、今回本書では、比較的小規模なものを取り上げている(最小は「茶山ゴコ」〈賃借人5人〉で、最大は「KAMAGAWA LIVING」〈賃借人16人〉である)。大規模になると、運営はアウトソーシングせざるを得ないし、建築基準法等から受ける制約も多い。一方で、今回選択した小規模な事例には、大型になることによって削かれていった、その建築ごとの、その場所ごとの異なった様相が顕著であり、それは現在進行形の様相である。オーナー、設計者、運営者、居住者などの複数の登場人物がそれぞれに彼らのシェアハウスに関わり続けることで、多様な変化にさらされながら、しかし独自の空間が生き続けている。それらは、単に単身居住者の住まいの選択肢というだけでなく、個人や家族という居住単位の再編に対して、用途地域制が分断した地域と住居の関係性の再構築に対して、ポスト成長社会を生きる日本の社会に対して、シェアハウスという住まいがもつ多面的な可能性を包摂しているように思う。

- 註
- 1)ここでは、複数の他人同士が個室以外の主要な空間を共用する住まいを、その大きさや建築形態に限らず、シェアハウスと総称することとする。一般に、運営業者の介入するものをシェアハウス、しないものをルームシェアとして区別するが、本書ではその両方をシェアハウスとして扱っている。
  - 2)Housing & Development Board(住宅開発庁)の略称。シンガポールでは、国民の8割がこのHDBが供給する住宅に住んでいる。
  - 3)柏木博×マニエル・タルディッツ「対談:古今東西おとりさま空間」『建築雑誌』2015年1月号。
  - 4)須賀佳那子・辻村夏菜「韓国(ソウル)における単身者用集合住宅に関する研究」日本女子大学2015年度卒業論文。
  - 5)通常の賃貸契約が2年が一般的であるのに比べて、シェアハウスの契約期間は1年であることが多い。

- 参考文献
- 小谷部育子+住総研コレクティブハウジング研究委員会 編著『第3の住まい コレクティブハウジングのすべて』エクスナレッジ、2012年。
- 上野裕理「シェアハウスの共用部の使われ方に関する研究——使用実態と居住者の認識の視点から——」日本女子大学2015年度卒業論文。
- 阿部文香「居住者実態に基づくシェア居住に関する研究と提案」日本女子大学2013年度修士制作。
- 樋渡彩華「Editing the Town 地域に住まうシェアハウス」日本女子大学2013年度卒業制作。
- 飯塚るり子「住人家族——シェア居住における空間構成の研究と提案——」日本女子大学2012年度修士制作。
- 阿部彩華「大都市圏における単身者居住に関する研究と提案」日本女子大学2011年度修士制作。
- 石井千絵「都市単身者住居における生活共有空間についての考察と提案」日本女子大学2010年度修士制作。

# 都市に 開く土間

SHAREyaraicho



所在地:東京都新宿区矢来町 個室数:7室+ゲストルーム1室 建物規模:地上3階  
敷地面積:128.60㎡ 建築面積:76.68㎡ 延床面積:184.27㎡ 個室面積:12.69~14.11㎡  
共用部分面積:28.05㎡(土間)、31.91㎡(キッチン・リビング) 家賃・共益費:73,000円・12,000円  
構造:鉄骨造 設計:篠原聡子/空間研究所+内村綾乃/A Studio





ファサードはテント生地。  
ジッパーを開けて入る

家具づくりの材料となった構造用合板。  
下駄箱、本箱、テーブルなど、住人が  
自ら制作しながら生活をスタート

エントランスでもある土間  
は多目的に使われる

2階の部屋からアクセスで  
きる1階個室上のロフト



プロジェクターと椅子を並べ、居住者が企画するトークイベント「scene」の風景。SNSで告知し、外部からも人が集まる



ハンガーやロープを設置して、ニューヨークのファッションブランド「sawa takai」の展示会も開催された

## 【進行形の住まいのデザイン】

「SHAREyaraicho」は、商業エリアにもほど近い、都心の住宅地に建つ。あらかじめシェアハウスとして計画された建築としては、国内ではごく初期のもの。利便性の高い立地に安く住める、という経済性だけでない、他人同士が集まって住む新しい暮らしを、テント生地に覆われたファサード、その背後の土間のようなエントランス空間に象徴される建築空間から提案している。間口6m、奥行き12m、高さ10mの空間に個室と水回りを入れた小さな箱が挿入されるという構成で、小さな箱と箱の60cmほどの隙間が1階、2階、3階の共用空間を緩やかにつないでいる。その隙間は、スーツケースやスノーボード、酒など、さまざまな生活用品の収納として利用されている。3階のリビングに面した隙間は、泥酔した客人の仮眠スペースになることもある。土間のようなエントランス、隙間の利用方法などは、居住者が住みながら、デザインしていく。つねに住まいのデザインが進行形であることもこのシェアハウスの特徴である。

## 【まちとつながる仕掛け】

3層吹きぬけた土間エントランスは、農家の土間のような活動空間であり、もちろん居住者にとってのエントランスである。つまり、多目的な空間である。竣工当時は居住者によって、この家で使う本棚、下駄箱、テーブルなどの家具づくりが行われていた。それが一段落した後、ギャラリー、トークイベント、さまざまなワークショップなどに使用されている。居住者が企画して、催しを行うこともあれば、外部に貸し出すこともある。土間エントランスは、そこが外部からの人も含めた活動の場となるこ

とで、まちとつながる仕掛けとなっている。こうして、テントポラリーではあるが、まちに開いて、住宅地に小さな賑わいをつくりだしている。

## 【居住者をフィルタリングする建築】

個室は7つで、常時7名の居住者が暮らしている。2年以上暮らす居住者が多い。そのほかにゲストルームがあり、海外から設計事務所に来るインターン生などに利用されている。ゲストルームの利用者のみならず、居住者もつねに、2名くらいは外国人である。外国人は安定的な職をもっている、適当な値段の住まいを見つけるのは意外と難しい。SHAREyaraichoは、外国人だからといって滞在や居住を断ることはない。この独特な、オープンエンドな建築空間を受け入れることができる人なら、ともに生活することが可能であろうと考えているからである。つまり、建築が居住者のフィルタリング機能をもっている、というわけである。



居住者によるリビングのテーブル制作の様子



## 【シェアのディテール】

DETAIL



居住者による  
手づくり棚  
原則ひとり1段  
つ割り当てられ  
靴を見せて収納  
している



土間に用意した  
パースペース  
イベント時に活躍  
するパーカウンター



3人で歯磨き  
できるシンク

3つの蛇口が並ぶ長いシンク。今はそれぞれの洗面キットのカゴがシンク下に並んでいる

## DATA

|             |     |           |            |
|-------------|-----|-----------|------------|
| 居住者数(満室の場合) | 7名  | 台所水栓      | 1本         |
| バスルーム       | 1室  | 冷蔵庫       | 大1台<br>小1台 |
| 洗面台         | 1台  | レンジ(オープン) | 1台         |
| 洗濯機・乾燥機     | 各1台 | 鍋・フライパン   | 7個・4個      |
| 掃除機         | 2台  | 炊飯器       | 1台         |
| コンロ(IH)     | 1台  |           |            |



大工道具を共有する

家具制作に使った大工道具や掃除用具  
など、壁に引っかけて収納



## 奥行きの深い個室1

道路に向けて開放的な個室。  
各個室には鍵がついている



### ラーチ合板の内装

床・壁・天井はすべてラーチ合板



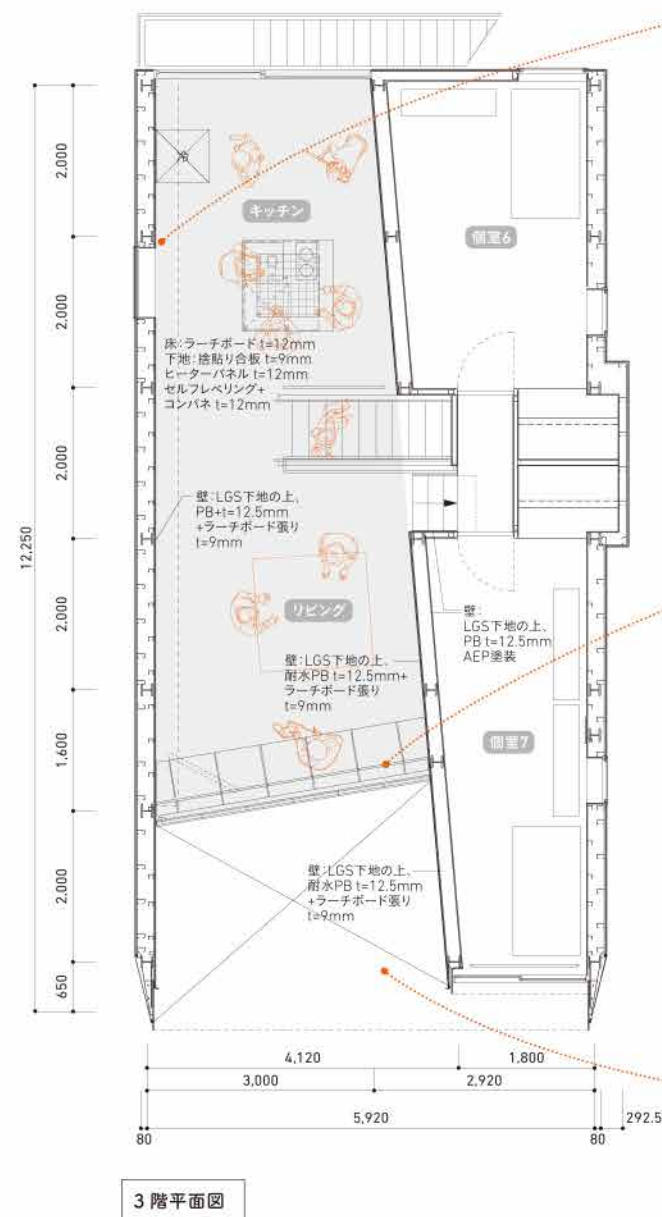
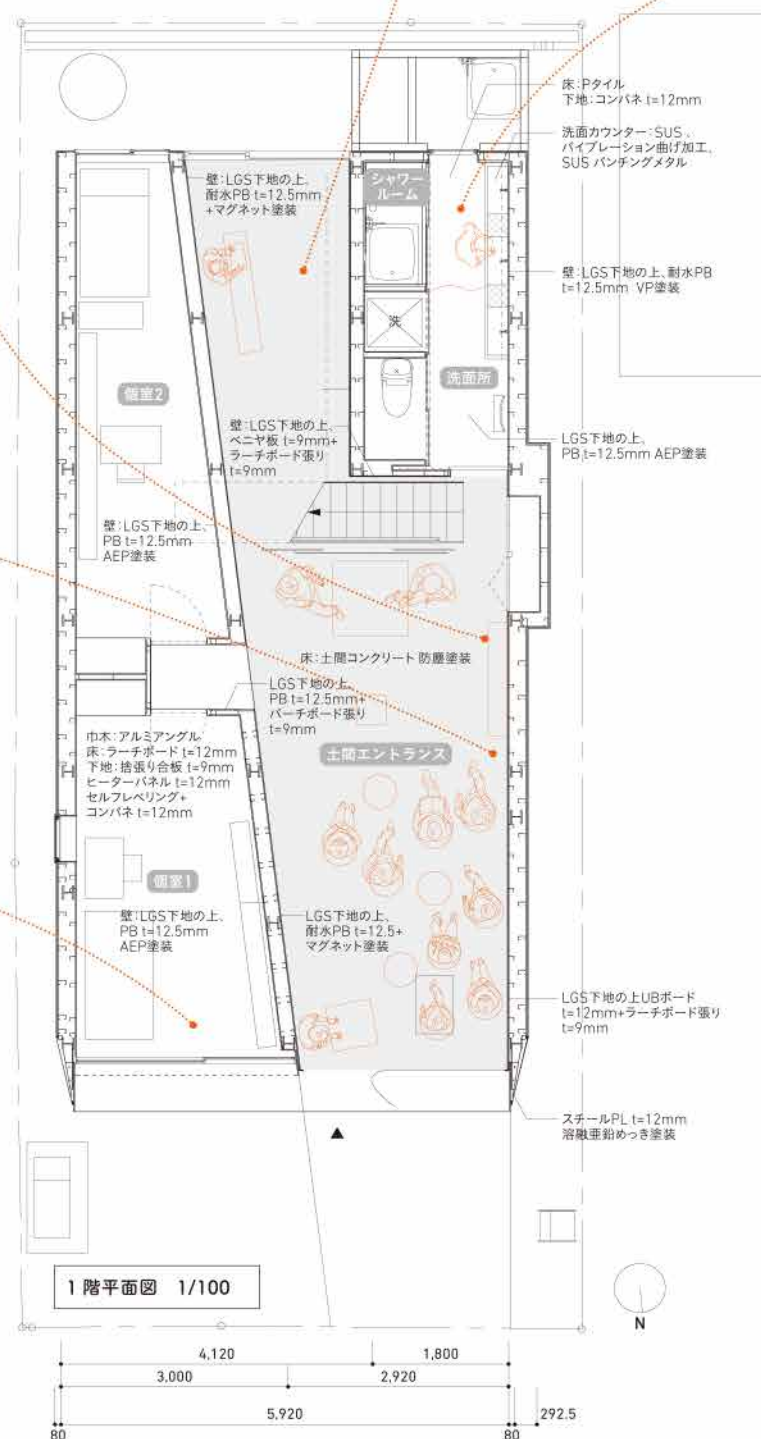
1階土間エントランスと  
上下につながるリビング開口

開口部手前のテーブルは、居住者による手づくり。脚を立てると食卓、低くすると座卓に



1～3階を縦に貫く土間エントランス

3階から見下ろすと土間エントランスが見渡せる





**POINT !**

屋上のハーブガーデンでは、いろいろな種類を育てていたが今はローズマリーだけが生き残っている



2階への階段の途中から玄関を見た風景。隙間には、洗面用マットレス、カメラの三脚、スーツケースなど、日常的使用頻度の低いものが納まる



DIY 制作した酒用ストック箱がちょうど納まる



居住者たちが旅した国のガイドブックやアート系の本が並ぶ



### 【私がここに住む意味】



以前ここに住んでいた居住者が、この家のことを「余裕がある」と言っていた。最初、その言葉はピンとこなかった。たしかに空間的には土間スペースや大きめのリビングや収納のための隙間など、余裕だらけである。しかし、空間的な余裕があるだけでは実はなににも起こらない。オーナーである父、設計者である母が入れ込んだもうひとつの「余裕」が、私がここに住むことだったように思う。私は家賃も払わず、できる限り、ここを気に入ってくれる、おもしろい住人を集め、興味のあるトークイベントを行い、ファッションや食のイベントを開いた。家具づくりにも携わった。たまには賑やかすぎて、近所からクレームをつけられることもあった。それでもこの空間が、竣工から5年近かった今でもイキイキと使われ、暮らしの場でありつつ人の出会いが絶えず起きているのはそうした、ハードとソフトの「余裕」が建築の中に設計されているからだと思う。

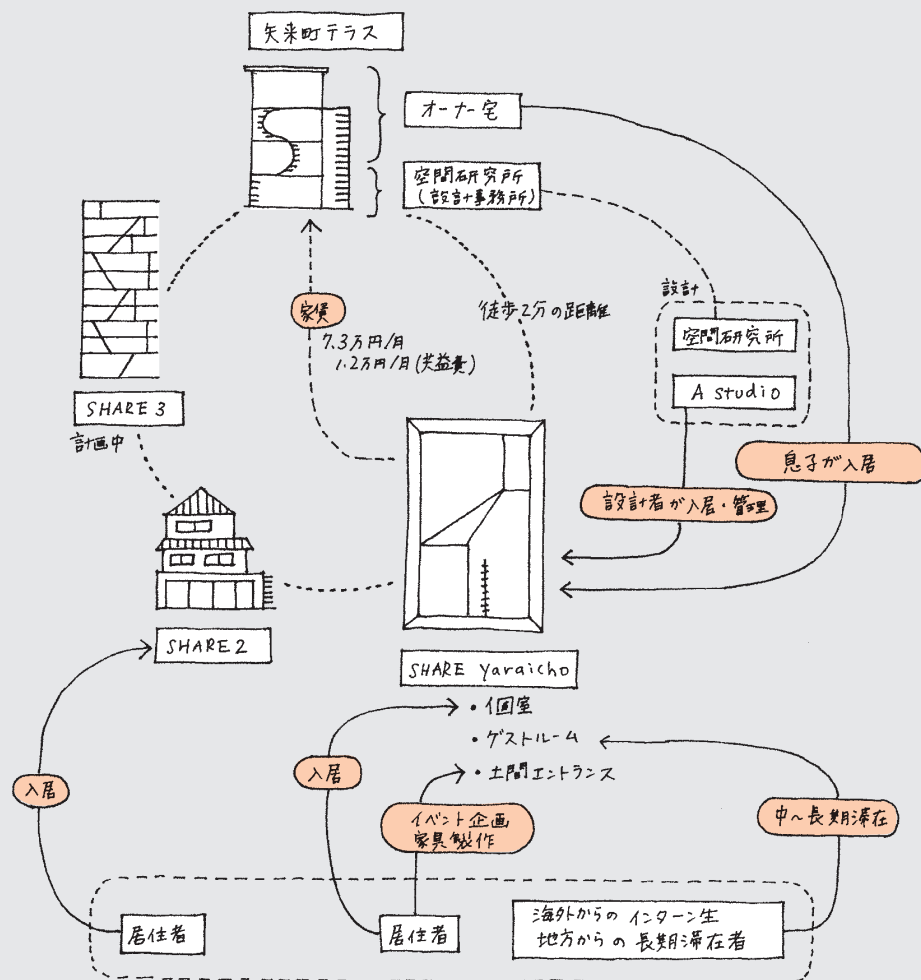


## 【家族と家を開くしくみ】

SHAREyaraicho は、その設計をした空間研究所から徒歩2分のところに位置している。空間研究所のある矢来町テラスの上階には、SHAREyaraicho のオーナーの住まいがある。このシェアハウスが当時は珍しい新築のシェアハウスとして計画された背景には、設計者・オーナー夫妻が近距離にいることが鍵となっている。つまり、竣工した後も、どのような居住者を集めるか、どんな運営をするかに設計者、オーナーが積極的に関わることが前提となっている。そうでなければこの実験的な住まいが、居住者にとって経済的な選択肢でありつつ、オーナーにとって採算ベースにのことは難しいからである。入居開始から、設計者のひとり内村綾乃氏とオーナーの息子がこのシェアハウスに住み、他の居住者と週末のミーティングを通して、生活のルールづくりをし、

ここでのシェア生活を立ち上げた。

1階の土間エントランスでのイベントはすでに紹介したが、3階のリビングルームは、それぞれの居住者が友人とパーティを開いたり、また、オーナーとその友人が食事に来るなど、オーナー住宅のエクステンションとしても機能している。2年後にできたもうひとつのシェアハウスとオーナー宅、空間研究所、SHAREyaraichoの間を、トークイベントのような行事、DIY、週末の鍋パーティ、ゲストルームの活用など、さまざまな行為が行き交い、面的な居住者のつながりをつくっている。他人が共に暮らすというオープンエンドなシェアハウスの空間が、普通の家に住む家族やオフィスの人びとをつなぐハブとして機能している。



資材倉庫から  
オープンコモンに

不動前ハウス



所在地:東京都 個室数:7室 建物規模:地上2階 敷地面積:105.56㎡  
 建築面積:77.77㎡ 延床面積:146.74㎡ 個室面積:7~8.5㎡ 家賃・共益費:75,000~90,000円・15,000円  
 共用部分面積:62.61㎡(1階)・48.37㎡(2階) 構造:鉄骨造+木造 改修設計:常山未央 / mnm